

四川省俄亜ナシ族の兄弟共妻型婚姻

松 岡 正 子

目 次

1. 先行研究
2. 俄亜大村の概況と歴史
3. 俄亜ナシ族の兄弟共妻型婚姻とアンダ

本稿は、2007 年 9 月に筆者が西番研究（図 1）の一つとして実施した、中国四川省木里県俄亜郷俄亜大村におけるナシ族調査のうちの婚姻についての報告である。

俄亜郷は、四川と雲南の省境の、四方を山々に囲まれた険要な山間部に位置する。そのため交通が極めて不便であり、外部との往来は馬か徒歩によって海拔 3 千数百メートルの山を越えていくほかはない。現在でも木里県で唯一、郷人民政府所在地まで車の通行可能な公路が通じていない郷である⁽¹⁾。しかし外部との往来が長期にわたって制限され、外来の文化や情報の導入も限られてきたために、当地には、なお生活様式や経済活動、宗教などに旧来の形が色濃く残されている。婚姻慣習や家族形態においても例外ではなく、兄弟共妻型や姉妹共夫型の婚姻が続けられている。

本稿では、先行の報告資料と 2007 年の筆者による調査にもとづいて、俄亜ナシにおける独特の婚姻形式の形成とその背景、近年の変化について考察する。

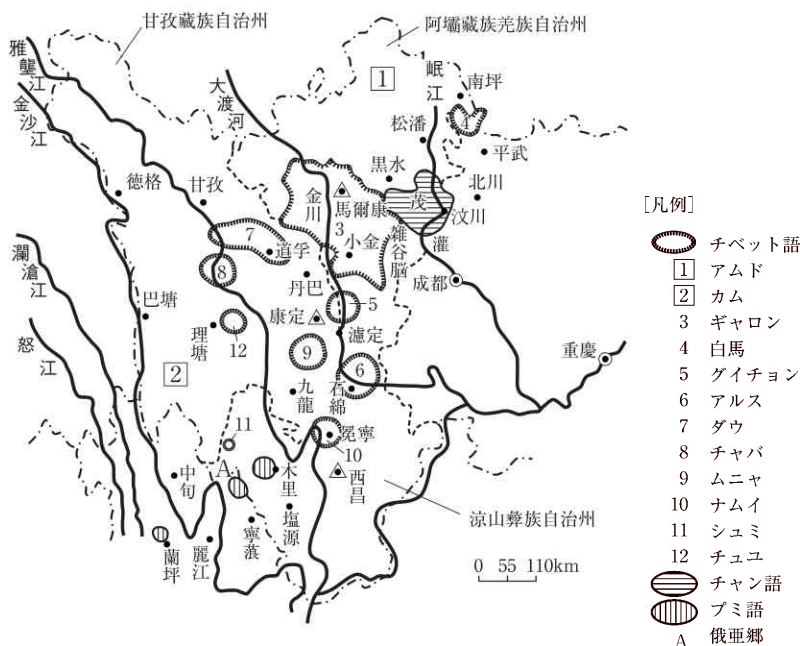
(1) 郷人民政府の書記によれば、08 年には公路が開通予定であるという。外部との往来は、例えば香格里拉県城からは車で約 3 時間かけて七樹湾まで行き、そこで馬に換えて海拔高度 3600 メートルの山を越え、およそ 12 時間で俄亜郷人民政府に着く。4 つの村へは、すべて山道を馬か徒歩で行き、河谷の俄亜大村までは約 30 分歩く。

1. 先行研究

四川省のナシ族については、1970年代後半から1980年代初期にかけて国家の少数民族調査の一環として次の2つの現地調査が行われた。

その1は、宋兆麟、劉堯漢、嚴汝嫻らによるものである。彼らは、1981年に雲南と四川の省境に位置するロコ湖から金沙江を越えて俄亜郷に入り、俄亜大村について詳細な調査を行った。このうち宋兆麟は、調査後に『共妻制与共夫制』（上海三聯）、『走婚与伙婚—金沙江奇俗』（雲南人民出版社）、『俄亜大村—一块巨大的社会活化石』（四川人民出版社 2003年）を刊行した。このうち2003年の宋報告は、それまで掲載されなかった1980年代当

図1 「西番」諸集団の言語分布



〔出所〕 四川省人口普查辦公室編「四川藏族人口」（中国統計出版社、1994）4－6頁、孫宏開「六江流域的民族語言及其系属分類」（『民族学報』、1983）1983－3、池田巧「西南中国（川西民族走廊）地域の言語分布」崎山理編「消滅の危機に瀕した言語の研究の現状と課題」（国立民族学博物館調査報告 39、2003）110頁より作成。

時の写真や図を多く収録しており、婚姻と家庭、経済生活、信仰の項目について個別の事例をあげ、具体的な報告が記されている。

特に婚姻と家族に関しては、情報が詳細であり、インフォーマントと筆者との問答などは、住民の意識を知る上で貴重な資料となっている。これらは当時を知る基本的な資料として重要であり、他の研究者にもしばしば引用されている。しかし恋人関係の「安達」(以下、アンダと記す)については、筆者の調査時に住民が写真について次のような不満をもらした。アンダは、社会の暗黙の了解事項であり、公開するものではない。原則として夜、人に知られないように通うものである。よって表紙の写真のように、正式の婚姻関係のない女性が明るいうちに堂々と男性の部屋に行くというのは不自然である。またアンダと説明された写真の2人の男女は、実は兄弟姉妹の関係である、と。宋報告には、事実の部分と宋氏自身の解釈が記されており、解釈についてはなお検討の余地があると思われる。

その2は、中国少数民族社会歴史調査として『四川省納西族社会歴史調査』(1987)に収められたものである。本書には、四川省内でナシ族とされるナシ人とナリ人について4ヶ所をとりあげ、①塩源县沿海公社達住村の納西族(李近春等 1980年2～3月)、②木里藏族自治县俄亜郷の納西族(劉龍初等、1984年8～9月)、③塩源・木里県の納日人(劉堯漢等、1980年3月)、④塩源县左所区納日人(楊学政等、1976年3～6月)における調査報告を収めている。調査項目は、社会歴史調査の定例項目に沿ったものと思われ、概況、婚姻、家庭、喪葬習俗、宗教信仰、民間伝説故事に分かれる。ただし当時の調査は、特に婚姻・家庭に集中して行われており、俄亜については生産経済や衣食住に関する項目がたてられていない。しかし数値を含む自然条件や文献に基づく資料などの基礎的資料があり、俄亜ナシのこの20年間の変化や、当時の他地域との比較から俄亜ナシの婚姻慣習の形成を考えるうえで、宋らの報告と重ねながら読むと有用である。

1. 俄亜大村の概況と歴史

俄亜郷は、総戸数873戸、総人口5694人で、チベット族とナシ族が人口の約90%を占める。このうちナシ族は最多の3598人で63.2%を占め、

次にチベット族が 1356 人で 23.8 %，漢族 735 人が 13.0 %のほか，ペー族が 5 人いる（2006 年）。これを 1980 年代初期と比べると，約 25 年の間に人口は 1.3 倍に増え，なかでもナシ族の伸びが大きい。1982 年には総戸数 592 戸，総人口 4291 人で，民族別にはナシ族が 2490 人（58.0 %），チベット族 1147 人（26.7 %），漢族 579 人（13.5 %）であった。この 20 年間に総戸数は 1.5 倍に増え，戸別の平均家族数は 7.2 人から 6.5 人に減少している。本郷では外部からの移出入はあまりなく，自然増加がほとんどである。よって戸別の平均家族数の増加は，分家の増加を示すものといえる。

俄亜郷は，俄亜大村のほか蘇達村，立碧村，俄碧村，長瓦村，魯司村の 6 つの行政村からなる（表 1）。ナシ族，チベット族，漢族はそれぞれが固有の言語を用い，ほぼ民族ごとに集住して暮らす。このうちナシ族は，平均海拔高度が 2000 メートルを越える蘇達河沿いの俄亜と蘇達，および東義河沿いの魯司の 3 村に集中し，さらに俄碧に約 700 人，卡瓦にも約 250 人がほぼナシ族だけの集落を形成する。郷全体の平均海拔高度は 2400 メートルで，西北部には海拔 4,418 メートルの特貢哈山が聳え，沖天河や金沙江などの河川が山間を南北に貫流する。年間平均気温 14 度，年間無霜期



俄亜大村

〔表 1〕 俄亜郷の 6 行政村の概要

	人口 (人)	戸数 (戸)	組数	民族 (%)	海拔 (m)	面積 (亩)	水田 (亩)	畑 (亩)	退耕 ¹⁾ (亩)	玉米	大麦	小麦 (100kg)	水稻	花椒	核桃	黄牛	馬	驢	ヤク	ブタ	ヤギ	メン ヨウ	黄金 ²⁾ (g)
俄亜	1413	185	5	ナシ	2100	2254	129	2125	1229	4540	2297	634	898	266	934	1042	182	356	2817	2817	5436	3048	70
蘇達	846	147	6	ナシ	2200	1131	77	1054	276	1947	994	802	192	25	281	1819	181	219	1327	2043	3602		7200
立碧	953	144	5	漢	1700	1959	20	1939	747	2246	1605	1805	40	20	70	1489	147	227		3186	4672	4672	
俄碧	1337	213	6	ナシ 56 藏 44	1700	1526	25	1500	1271	512	288	905	45	51	81	575	210	453		2899	4023		6350
卡瓦	840	131	4	ナシ 31 藏 69	1800	1242	99	1143	681	1314	322	1207	201	67	130	1325	112	334	292	1879	6663		
魯司	305	53	2	ナシ	2000	441	10	431	300	517	214	497	44	14	66	758	76	67	455	706	1486		

〔注〕（１）退耕還林：傾斜地の耕地を林地にすること。本村では、2002 年に始まり、04 年までは、1 ムーあたり米 240 斤、05 年からは 1 ムーあたり現金 240 元が補償された。

（２）東義河と蘇達河は、砂金の産地として知られている。

〔出所〕 2007 年現地での聞き取りにより作成

260 日、年間平均雨量は約 1,000 ミリで 7～9 月に集中し、比較的温暖で雨量も十分である。また蘇達河と東義河からは砂金がとれ、現在も蘇達村と俄碧村の住民の主な収入源となっている。

俄垂村は、俄垂郷の 6 村のなかで最も古い村落で、400 年以上の歴史をもつ。村内は、かつての支配者であった木官府の屋敷を中心に河の東側に住居が集住し、背後にある神山では、毎年、祭天や祭山などの活動を行う。中腹には火葬場がある。河の西側には水田や段々畑が拓かれ、山頂は草地になっている。表 1 から明らかなように、人口や総面積、耕地面積が最大である。河谷には水田、河の西側斜面には棚田が広がり、食糧生産も最多で、水田はほぼ本村のみに集中している。山頂の牧草地では、ヤギやメンヨウ、ブタを放牧し、ヤクは本村と蘇達だけが飼育する。経済作物に相当するものはないが、食の自給自足は可能である。

本村では、生活圏をほぼ村内で完結できたために衣食住の自給自足的生活を長期にわたって行ってきた。それは、かつては外部に対する防衛において有利であったが、近年の経済中心の社会においては、これといった現金収入の手段がないことは貧困を意味している。本村は、一人当たりの年間純収入が約 1700 円で、郷内では豊かなほうであるが、四川省の平均純収入の 70 % 弱にすぎない。しかも現在の現金収入は、退耕還林の補償が主である。補償は、2002 年に始まり、04 年までは 1 畝あたり米 240 斤が支給されたが、生態林で 5 年、経済林でも 8 年という制限があるうえに、05 年からは現金 240 元に替わり、実質的な収入減となった。

また本村では、かつては小学校の就学率も約 70 % にすぎず、12 歳になってやっと小学校入学という例もあった。しかし 2004 年から国家が「兩免一補」政策（学費と寄宿舎費の免除、生活用品費の補助）をうちだして、ようやく小学校の就学率が 100 % に近づいたが、郷内に中学校はない（08 年 9 月に開校予定）。このように住民は、教育水準が低いために外部への出稼ぎもあまり望めない。これまで高校進学で郷外に出たのは 3 名にすぎず、高校のある木里県の県城までは徒歩で数日を要する。現在も外部との物資の往来は、主に馬帮による。馬帮は、各戸の若い男性が自家の馬数頭を引いて友人らと行う小規模のもので、馬で山を越えて雲南省側の永寧県や香格里拉県の県城に行き、塩や生活用品等を購入して村まで運ぶ。

住民は、多くがなお経済重視の外部世界とは異なる価値観で暮らし続けている。総戸数 50 戸のうちテレビがあるのは 15 戸にすぎず、住民の約 70 %がテレビをもっていないために普段から外部の情報に接することも少なく、家具や家電など消費物資はあまり入っていない。ほとんどの家庭が今もトウモロコシの咂酒を作っている。自家で酒を製造することは、四川の民族地区でもかなりめずらしい。ここでは、上級学校への進学が試験に合格して人民解放軍の軍人になることが農村をでるための最も賞賛される方法であり、考え方はほぼ改革開放前の中国農村のそれを思わせる。

3. 俄亜大村の婚姻と家族

俄亜ナシは、伝承によれば、明代に雲南麗江の木土司が四川進出の際に派遣した兵士たちの末裔である。木土司が撤退した後も四川にとどまり、敵対するチベット族に囲まれながら、防御に適した土地を選んで移り住んだ。彼らにはかつての支配者の末裔としての誇りがあり、内部で完結する閉鎖的な社会を築いて自集団の存続を図ろうとした。その結果、婚姻は村内で繰り返されて濃厚な血縁関係が形成されており、特殊な家族形態も出現した。

多様な婚姻慣習とはつぎのようである。宋報告によれば、恋愛は自由であり、成人に達したらほとんどがアンダ（特定の恋人）をもつ。しかも生涯に何人ものアンダをもつ。しかし婚姻は父母が決め、逆らうことはできず、離婚も認められない。道徳的にも経済的にも大家族を理想とし、父母を扶養し、姑嫁関係を円滑にするために、兄弟の子と姉妹の子との婚姻が最も奨励されている。婚約は非常に早く、早婚が一般的である。結婚式をあげてもすぐには同居せず、夫は妻のもとに通い、子供をもうけた後に夫方に行く「不落夫家」も行われている。婚姻形態には、一夫一妻型、一妻多夫型、一夫多妻型があり、嫁がず娶らないアンダ関係のまま一生をおえる場合もある〔宋 2003：11～71〕。

本章では、多様な婚姻慣習がどのように関連しあって俄亜村の社会秩序を形成してきたのか、さらに現状と今後について、1980 年代の宋報告と劉報告をもとに具体的に分析し、先行研究と筆者の 2007 年の調査とを比較

しながら考察する。

（１）１９８０年代の婚姻形態

劉報告によれば、１９８０年代には、婚姻型式は父母がきめる一夫一妻型が主である。１９８２年の統計では、一夫一妻型は総戸数 130 戸のうち 74 戸で、57 %を占め、健在の夫婦 169 組のうち 106 組がこの型で、63 %に達する〔劉 1987：77〕。しかしこれは、１９８０年代においてなお約 40 %が一夫一妻型ではないことを示すものでもある。中華人民共和国では、１９５３年に婚姻法が成立し、一夫一妻制を婚姻の基本型としてすでに 30 年を経ている。にもかかわらず、ここでは依然として国家の婚姻法とは全く異なる婚姻慣習が社会的に公認され、存在していた⁽²⁾。

一夫一妻型以外の婚姻 63 組には、一妻多夫型、一夫多妻型、嫁がず娶らないアンダ型がある。このうち最多が一妻多夫型で、63 組中の 56 組で、約 90 %であり、全体の 169 組中でも 36 %を占める。しかも本村の一妻多夫型は、複数の兄弟が一人の妻を娶る、兄弟共妻型である。また複数の兄弟といっても、多くが比較的年齢の近い 2 人の兄弟の間で行われている。兄弟共妻型の 56 組のうち、2 人兄弟の場合が 44 組で 78.5 %とほとんどを占め、兄弟 3 人が 10 組で 18 %、兄弟 4 人が 2 組で 3.5 %である〔劉、1987：77〕。また一夫多妻型も、実は姉妹共夫型であり、兄弟共妻型の姉妹版といえる。

しかし宋報告および劉報告によれば、本村の婚姻には様々な問題がある。

第 1 は、婚姻は父母の決定によることである。それは、婚姻の目的が大家族の維持にあるからである。これは絶対的な「老規矩」であり、たとえ夫婦間の感情があわないても離婚は許されない。婚姻に関しては、本人同士の感情は問題にされないため、むしろ最初から良好な夫婦感情があるほうが稀であるとされる。また最も奨励されるのが、兄弟と姉妹の子どうしの結婚であるが、それは兄弟姉妹の子達は幼い頃から一緒に育つため、舅姑は実の親と同様の近しさであり、嫁姑の確執が起こりにくいからだとする。反面、若夫婦の感情は兄弟姉妹のそれであり、結婚後もそれぞれの

(2) 少数民族は、かつては早婚が多く、チベット族の一夫多妻型婚姻のように特殊な婚姻慣習もある。そのため婚姻法の適用や実施については民族の慣習が考慮され、一様ではない。

アンダと関係が続く。

第2は、「不落夫家」が一般的であり、同居しないままの夫婦もあることである。本村では、結婚式後も妻が夫方で同居はせず、子供ができて始めて同居する。婚姻は嫁ぐ側にとっては労働力の減少であり、嫁ぐ側の家庭経済も重視されている。同居の時期は、双方の家庭の働き手の過不足や経済事情、本人同士の感情の如何によって決められる。また夫方に移っても夫婦関係を結ばず、夫あるいは妻がそれぞれ別の相手とアンダ関係を結ぶ場合も少なくない。ただし相手の如何に関わらず、妻が生んだ子供は夫の子とされる。

第3は、兄弟共妻型あるいは姉妹共夫型の実施によって結婚適齢期の男女のアンバランスがくずれていることである。本村では共妻型が多いことから、必然的に結婚できない女性が生じる。住民はこのような女性に同情的である。劉報告では、生まれた家に生涯留まって嫁がず、アンダ関係によって子どもを生んだ女性が80年代初めにも10数人おり、生まれた子供は実家で育てるとある〔劉 1987: 87〕。

また兄弟共妻の場合、結婚式は長男か次男が適齢期になった時に行い、他の兄弟も新郎として並ぶ。しかし年齢の離れた兄弟間では、末弟が成長した時には妻はすでに中年で、年齢の差だけではなく性格や好みも末弟とはあわない。よって共妻は多くの場合、年齢の近い兄弟の間で行う。ただし年齢の近い兄弟間でも全員が夫婦関係に満足するわけではない。そこで満足できない場合は、自分だけのアンダを外部にもつ。あるいは兄弟全員で共妻を娶った場合、年齢の離れた末弟が婚姻の解消を父親に申し立てることがある⁽³⁾。

では、このような矛盾や問題があるにも関わらず、多様な婚姻慣習が継続されてきたのはなぜなのか。一夫一妻制について、宋報告では次のような事例をあげる。生格塔は、俄亜村で最初の黨員で支部書記を務めた。結婚も共産党の婚姻法に従って本村で初めて一夫一妻制の小家庭（核家族）

(3) I家では、1950年に長男と2歳下の弟、12歳下の弟の3人の兄弟が52年生まれの子を娶った。上の2人は比較的良好な関係で妻を共有しているが、末子は成長後、この婚姻に不満をもって解消を望んだため新たに嫁を迎えた。I家では、父が健在で分家していないので、長男と次男は1人の妻を共有し、三男は一夫一妻型で同じ家に暮らす〔劉 1987: 77～78〕。

を執行した。10 数年間暮らしてきたが、大家族を離れて孤立無援であったためにだんだん貧しくなった。小家庭はこの地ではやはり無理である。4 人の息子には共通の妻を娶りたい。そして大家族形態のもとで少しでも豊かに暮らさせたい、と〔宋 2003 : 83 - 84〕。

このように少なくとも 80 年代までの最大の理由として考えられるのは、貧困である。限られた耕地や家畜で自給自足できるだけの最低の生産力を維持するには、家産の分散を極力さけ、農業と放牧という主要な生産労働を家族で力を合わせて行う、そのためには子供の結婚による分家をさけ、大家族の形態を継続する一方、出費の面では、経費を要する嫁迎え（婿迎え）に関わる経費をできるだけ軽減することが必要であった。そこで共妻や共夫、あるいは兄弟姉妹の交換婚などが繰り返されたと考えられる。

第 4 は、娶らず嫁がずのアンダ型関係が、多様な婚姻形態の矛盾の解決法の一つとして行われていることである。アンダとは、正式な婚姻以外の男女の恋人をいう。金品の授受も契約もなく、個人の愛情だけで結ばれる。ただし男女の 1 ～ 2 回程度の関係はこれに相当せず、比較的長期の安定した関係の男女をアンダとよぶ。俄亜ナシは、男性は 17,8 歳、女性は 15,6 歳になると恋愛は自由であり、結婚式をあげた後も夫あるいは妻以外の異性との恋人関係が黙認されている。ただしアンダは、白昼堂々といわれるものではなく、できるだけ他人に知られないようにする。劉報告によれば、80 年代初めに生涯、正式の結婚をしなかった女性は 10 数人いた。

しかしアンダは、同じナシ族の一支とされるモソ人のアチュ婚とは異なる。モソ人は、成年になったらアチュとよばれる恋人をもって、男性が夜に女性の部屋に通い、一生のうちで何人ものアチュをもつ。母が家長となる母系制が行われており、社会全体が嫁がず娶らないという婚姻形式を実施する。成人は実家に生涯留まり、女性がうんだ子は女性の実家の男性が養う。これに対して俄亜ナシでは、父が家長となる父系制が原則で、一夫一妻を主とするものの兄弟共妻や姉妹共夫もあり、嫁がず娶らない男女もいる。また当地では、成人男性のみが家屋屋上に自分の部屋をもっているため、アンダ関係を結ぶには、夜、女性が男性のもとを訪れ、明け方、秘かに帰る。

以上のように、俄亜ナシでは、麗江ナシと同様に、青年期の恋愛は自由

であるが、婚姻はすでに親が決める一夫一妻制であったと考えられる。ところが俄亜に定住するようになって外部の異民族と対峙して内部だけで完結する社会をつくらざるを得なくなったことや、貧困のなかで自給自足の経済を維持するには、結局、共妻あるいは共夫による大家族制が最も理想的であるということをみなが認識するにいたったと考えられる。劉報告では、共妻や共夫という婚姻形態は周辺のチベット族の婚姻に影響を受けたともいう〔劉 1987：78〕。

そして特殊な婚姻形態のために生じた様々な矛盾を内々で解決する方法も考えだされた。それが男女の愛情部分を補うアンダ関係の結婚後の継続の黙認である。よって結婚式は、新たな夫婦の開始ではなく、家庭経済を維持するために新しい家族成員を迎えたことを社会に告げる儀式となった。俄亜村では、夫婦は家庭経済を支える表の制度であり、アンダは男女の愛情を満たす裏の制度であったといえる。本村では、嫉妬や独占欲といった男女の愛情にはつきものの原因による殺傷事件がほとんど表沙汰になっていない。それは、多様な婚姻慣習が社会秩序を維持する「老規矩」として認識され、それが伝統として守られていったからであろう。

（２）四川省塩源县達住村のナシ族のアンダ

では、俄亜ナシの様々な婚姻慣習は、本当に「老規矩」として必要であったのか。木天王の兵士の子孫として同様の歴史をもつ達住ナシの事例と比較して考察する。

塩源县沿海郷達住村のナシ族（以下、達住ナシと記す）は、俄亜ナシと同様の歴史をもつ。1987年の李報告によれば、本村は81戸中75戸、570人がナシで、周辺にはナリやプミ族、チベット族が居住する。伝説によれば、明代、麗江の木土司が雲南の寧蒗や四川の塩源、木里、中甸に進出した際、兵士達の一部が木土司の勢力が衰えた後も幾つかの土地を経て、最後にロコ湖の東北に位置するこの地に定住した。初め永寧土司の管轄下にあったが、かつて敵対していた相手であったためにあえて木里大ラマの支配下に入った。しかし俄亜ナシと違って日常的に周囲の他民族と接触する機会が少なくなかった。ナリ（ナシ族の一支）やプミ族、チベット族と近接し、永寧までの道路はすべてこの地を通るため、ナリ語やプミ語も理解

し、多くが漢語もわかる〔李近春、1987：1～3〕。

達住ナシの婚姻は、一夫一妻制である。父母が決め、当事者本人に選択の権利はない。婚前の男女の恋愛は同一の「斯汝」（父系親族集団）以外では許されたが、この100年の間に「斯汝」内の婚姻も行われている。他民族に囲まれながらも木天王の兵士の末裔であるという誇りをもち、血統の純潔性を保とうとして村内婚を行った結果、姑舅表婚（父の姉妹の息子と母の兄弟の娘の婚姻）や姨表婚（母の姉妹の子どうしの婚姻）が蜘蛛の巣状にはりめぐらされた。しかし農業生産や馬による運送業の発展、経済文化交流の増加により、村外の同一民族や近隣の他民族との通婚もでてきた。この150年余りの間に、村外婚に該当する者は56名で、そのうち外部から嫁いできた者が18人、外部に嫁いだ者が22人、婿入りした者が6人、外部に婿に行った者が6人いる。地域は寧波県の永寧、大小洛水、北葉壩、塩源県の長白、臥竜河、前所、三河、木里県でみな近隣である。また民族別では、同一民族のナリが44人で80%を占め、プミ族4人、漢族4人、チベット族2人、ナシ族2人である。

またかつては、長男にだけ妻を娶らせ、次男は結婚せずに同居した。次男はラマになったり、木里大ラマのために賦役にでたり、一家の次世代を扶養する義務があり、子供達は父の弟を父と同様に尊重した。末子は、馬を使って商売をする能力があれば結婚させた。姉妹共夫型が3例、2つの家庭の兄弟姉妹を交換する形の結婚が4例ある。また未婚のまま、娶らず嫁がず型もある。1980年代には、適齢期を越えていながら未婚の男子が27名、同様の女性が27名いた。一部の女性は密かに未婚男性と恋愛して性的関係を持ち、4人が子供を生んだが、やむなしとされた。老人の話では、結婚しないのは生活が苦しくて妻子を養えないからであるという〔李1987：19〕。

俄重ナシとの大きな違いは、兄弟共妻型婚姻がないとされることである。しかし次男が結婚しないで同居するというのは、次男については実質的な共妻型かアンダ関係が継続されていた可能性が高い。やはり俄重ナシと同様に、歴史的な内婚制の傾向と貧困による大家族維持の必要性が結婚形態に大きな影響を及ぼしている。また達住では、貧困や男子の出家が男女比率のアンバランスをうみ、結婚できない女性がアンダを結んでいる。しか

し達住村はこの地域の交通の要衝の一つで、経済発展の機会は俄亜よりも高いことから、一夫一妻制の普及が進んだ。ただし、やはり同様にアンダによる社会の裏側からのサポートも表制度の維持のために暗黙の了解をえていたといえる。

（３）近年の俄亜ナシの婚姻と家庭

本節では、俄亜村 1 組を事例として家族と婚姻について考察する。1 組全 50 戸の家庭状況（表 2）は、2006 年 9 月、TZ（男性・60 歳・1963 ～ 2006 年まで俄亜村会計を担当）と住民数名からの聞き取りによる。

TZ によれば、1 組には複数の家名がある。家名は、父系親族集団のうち近い関係の間で同一名称が用いられる。彼らの婚姻では、兄弟と姉妹の子供どうしの婚姻が最もよいとされ、同一家名内では婚姻関係を結ばない。家名別の戸数と家族数は、机黒 7 戸、宋得 7 戸、瓦初 5 戸、東巴 5 戸、拉布 4 戸、机机美 4 戸、拉波 3 戸、打机 3 戸、木瓜 3 戸、加黒 2 戸、阿珠・高上・英扎・瓦克・高文・机才が各 1 戸である。異なる家系からなる兵士団の末裔という歴史的要因が村内婚を可能にさせたといえる。

住民の話によれば、近年結婚した若い世代のほとんどが一夫一妻の婚姻である。これは全村でみられる傾向であり、結婚後は可能な限り親や既婚の兄弟と同居する。一夫一妻型は、1982 年には全村の約 60 % にすぎなかったが、この約 20 年間に、一夫一妻型を当然とする考え方が若者だけでなく親の世代にも普及したことがわかる。本村では、依然として家族の絆は強く、親の同意のない結婚はありえないからである。

むろん総戸数 50 戸のなかには、一夫一妻型ではない婚姻もある。兄弟共妻型がなお 11 組あり、このうち 2 人兄弟が 9 組、3 人兄弟が 1 組、4 人兄弟が 1 組である。年齢的には、50 代が 5 組、40 代が 6 組であり、一世代前の婚姻である。また 2 例については、共妻の 2 人の兄弟は、夫のうち 1 人が放牧のために常に山にいと説明する。なお 40 代の共妻夫婦のうち 1 組はすでに共妻型を解消し、弟はアンダ婚で子供を産んだ妹とともに分家している。妻が弟とはあわなかったからだという。また別の 40 代夫婦の例では、40 代の長男と次男は共妻であるが、30 代の 3 男は一夫一妻婚であり、この 3 人兄弟は結婚後も父とともに同一家屋内で生活してい

〔表 2〕 俄亜村 1 組の家族・婚姻・家庭経済

	戸名	家 族			婚 姻			家 庭 経 済					テレビ	磨面机
		家族数	戸主の年齢	①分家 年収(千円)	②兄弟共妻	③イトコ婚 交換婚	未婚の母	耕地(市)	退耕(市)	馬(騾)	牛	ヤギ	ブタ	備註以外の事
1	机黒	5	36	3				2.1	2	2	×	15	10	
2		3	60	1	○			3.1	4	1	×	8	8	
3		6	45	7	○			1.1	4	2	2	10	15	
4		6	48	2	○			5	2	2	2	×	15	
5		4	33	0.9	○			5	1	1	1	×	5	
6		6	69	2	○			13	3	3	2	30	15	
7		6	61	6	○			9	4	4	3	20	10	
8	宋得	5	45	1	○			4	2.5	×	×	9	5	
9		10	57	2				15	4	3	3	20	15	
10		5	48	2	○			5	1	1	1	10	9	
11		9	25	10				13	5	4	3	×	20	商い
12		5	38	1	○			7	1	2	4	×	20	○
13		9	72	10		1	1	11	2	3	5	15	10	○
14		5	58	0.8	○			7	1	2	5	20	10	
15	瓦初	7	70	5		2 (50代)		11	7	3	8	70	20	
16		5	43	0.8	○			5	4	2	×	×	5	
17		9	59	2			2 (30代)	15	5	4	4	15	15	
18		14	54	6				21	5	6	8	110	30	
19		14	53	8		2		19	4	4	12	100	20	商い
20	東巴	12	59	10			1 (40代)	15	3	4	5	50	10	商い
21		10	49	1	○	2 (40代)		12	3	3	4	10	15	
22		14	57	5				14	4	3	9	120	25	
23		12	71	4		2 (40代)		28	6	5	×	120	20	○
24		13	60	5				15	12	5	8	20	15	○
25	機機美	8	56	2				15	4	2	5	15	10	
26		5	70	1				9	4	2	3	20	10	
27		4	45	1	○			3	1	1	3	30	10	
28		5	40	1.5	○		2	3	1	1	1	×	15	
29	打機	5	65	3		2 (40代)		11	4	2	3	40	15	
30		6	70	0.8				9	2	2	3	×	10	
31		9	58	8				17	5	4	6	50	10	○
32		4	44	10	○			5	1	1	1	10	×	
33	拉布	9	77	6		3 (50代)		13	5	2	2	30	20	
34		6	69	1				12	7	4	5	40	15	
35		5	45	5				13	2	4	5	15	20	
36	木瓜	6	55	2	○			5	9	3	5	20	20	
37		8	59	2	○			15	3	5	7	20	15	
38		15	71	10		4 (50代)		19	11	6	12	100	15	○
39	拉波	6	37	5	○			19	5	3	7	30	20	
40		5	37	2	○			2	1	2	1	×	8	
41		7	55	1				13	6	3	3	20	15	
42	冷布	4	45	10				1	5	1	×	×	3	商い
43		9	65	10		2 (40代)		21	11	5	9	20	15	医者
44		9	65	10		2 (40代)		11	3	3	7	100	20	○
45	加黒	13	69	10				21	5	3	7	30	20	
46		13	64	5		2 (40代)		2	1	2	1	×	8	
47		12	42	8				10	4	3	3	10	15	
48	瓦克	9	71	10				19	9	5	8	60	20	
49	高交	4	63	1				13	5	6	3	15	10	
50	機才	13	67	1				20	7	8	9	4	30	商い

- 〔注〕 ①分家：○は分家したために同世代に 2 組以上の夫婦がない場合で、核家族が直系家族。無印は拡大家族（大家族）。
 ②兄弟共妻：2 (50 代) の例は、2 人の 50 歳代の兄弟が 1 人の妻をもつこと。
 ③交換婚は、1 組の兄と弟が 1 組の姉と妹とそれぞれ結婚する形態、本村では 21 と 28。本村のイトコ婚 (NO13) では、兄と妹がそれぞれの娘と息子の婚姻を決めた。新夫婦は 20 代。
 ④未婚の母：恋人関係（アンダ）のままで子供を生み、母側で育てる。2 (30 代) の例は 30 代の未婚の 2 人の娘が子供を持つこと。

〔出所〕 2007 年現地での聞き取りにより作成。

る。これらの事例によれば、一夫一妻型が一般的になったのは、現在 30 歳の夫婦が結婚する頃、すなわち 1980 年代半ば以降からと考えられる。また一夫一妻婚になっても、多くの場合、分家はせず、大家族を形成している。

これに対して旧来からの慣習で、なお根強いのが、婚前婚後のアンダ関係である。本村には、嫁がずに子供を生んだ女性がなお 7 例ある。20 代が 1 名、それぞれ 2 人の子供をもつ 30 代が 2 名、40 代が 2 名、50 代以上が 2 例で、現在もなお行われていることを示している。現在の婚姻は、アンダ関係から結婚に至る場合も少なくないとはいえ、なお相手の決定に親の意向が働いていることをうかがわせる。それは、現在も 20 代の結婚において 30 代の兄弟姉妹の交換婚が 2 組あることや、親が決めた交叉イトコ婚が 1 組あることから推測される。

では、なぜ結婚が今日なお、当事者の意思以外の要因によっても決定されるのか。表 2 によれば、2006 年度の本村の戸別の平均年収は約 5 千元であるが、1 万元以上が 11 戸、8 千元が 4 戸、7 千元が 1 戸、6 千元が 3 戸、5 千元が 8 戸、5 千元未満が 26 戸である。これを家族数でみると、8 千元以上の豊かなグループは平均 12.8 人で、15 戸のうち 14 戸が拡大家族であるのに対して、5 千元未満は平均 5.8 人で、26 戸中約半数が核家族である。また全戸数中の核家族のうち 8 戸は戸主が 40 代以下で、分家による独立である。やはりかつてと同様、経済的要因が大きく関与している。

以上によれば、現在も経済的な豊かさは労働力の多さと繋がっており、分家は経済的には決して好ましい状況をうんではない。また労働力が多い場合は、若い世代が馬帮をして外部から生活用品や食品などを仕入れ、小さな商店を開いて商いをする、あるいは農牧産品を外部に売るという現金収入の道も可能である。表 2 から明らかなように、大家族は、経済的には概して豊かであり、磨面機や油鋸などの生産用具だけではなく、テレビやラジカセなどの電化製品もそろっている。

では、現在、彼らはどのような家族形態を理想としているのか。典型的な大家族として JG（68 歳・男性）家の事例をあげる。JG は代々シャーマンの家系で、本人も能力の高いシャーマンの一人として知られている^④。代々複数の兄弟が共妻の婚姻を続け、大家族で暮らしてきた。JG の父も兄弟 2 人で共妻だったが、彼の世代は、貧しくて他の兄弟が育たず、妹が 1



占書によって相談事に答えるシャーマンのJG

人だけいて、村内に嫁いだ。

JG には、妻（66 歳、村内出身）との間に 3 男 3 女がいる。長女と 3 女（45 歳と 31 歳）はともに舅舅（妻の兄弟）の 2 人の息子（兄と弟）に嫁いだ。婚約は親同士が早くに決めており、最も理想とされる婚姻である。次女は自由恋愛で村内に嫁いだ。長男と次男（41 歳と 33 歳）は村内の姉妹と結婚した。親同士と本人達の意味であったという。現在は、3 世代が同居し、両親、長男と次男の家族、3 男（25 歳、未婚）の 14 人家族である。JG は家長として大変尊敬されている。また長男と次男の妻は姉妹なので、家内の女性たちの人間関係は良好であり、孫世代の 2 家族の子供たちは、ほとんど実の兄弟姉妹として育てられている。

JG 家は、1 万元以上の年収があり、村内でも経済的に豊かな家庭である。2007 年は、20 畝の田畑のうち、水田 14 畝で 30000 斤の米を収穫し、

(4) 筆者が在村中にも病気の治療や家族のことを占ってもらうために村人がよく来ており、若い弟子たちも相談にきていた。機才家では、長男が労働のあいまにシャーマンの修行をしている。本村には、現在もおお 10 数名のシャーマンとその弟子たちがいる。本来は、人々につくすための仕事であるが、実質的には特定の現物あるいは金銭の報酬があるため、若い世代には一つの半専門的な職業として意識されている。

6 畝の畑では 5 畝からトウモロコシ 4000 斤を得、1 畝には自家用の野菜を栽培した。農作物はすべて自家用で、自給には十分である。また 7 畝を退耕還林にして、現金 1680 元を受け取った。家畜は馬 8 頭、黄牛 9 頭、豚 30 頭、綿羊 4 匹ある。馬は 3 男が馬帮となって物資の運搬に使用し、仕入れてきた日用品を次男が小商店で売る。長男は木匠の技術をもっている。兄弟で漢方薬材を採取に行くこともある。家庭経済は長男がすべてをとりしきっている。JG にはシャーマンの謝礼としての収入もある。JG 家には、テレビや小型ステレオセットがあり、最近、簡単なソーラー機も買入れた。

JG 家の事例でも明らかなように、大家族は家族間関係がうまくいってさえいれば、やはり経済的には最も望ましい家族形態である。際立った現金収入の道が見つからない限り、分家して零細な家庭経済で豊かになることは、少なくとも本村では容易ではない。そのため大家族向けの婚姻、例えば兄弟姉妹の交換婚は、本人の承諾があればより望ましい結婚とされている。しかし婚前のアンダ関係が自由であるという慣習は、若者の感情からいえば今後も継続されるだろうし、そうなれば本意ではない結婚もありうる。いわゆる未婚の母を慣習として長く受け入れてきたことからいえば、結婚後のアンダ関係が秘かに続けられる可能性も否定できない。

おわりに

俄亜ナシでは、長期にわたって兄弟共妻型や姉妹共夫型の婚姻、および不落夫家という慣習が行われてきた。これは、歴史的に意図的に外部とのつながりを断ってきた環境のなかで内部で完結した社会を築くために、また貧困のなかで大家族制によって経済生活を安定させるために形成された慣習であった。しかしこのような婚姻形態は、一方で適齢期の男女のバランスを崩し、結婚できない男女を生んだばかりでなく、男女の感情的な部分にも大きな矛盾を残した。そこで、人々は旧来の婚姻慣習を「老規矩」として遵守させる一方で、アンダ関係によって「老規矩」のさまざまな矛盾を解決し、なによりも男女間の感情を大切にすることを暗黙の了解事項とした。すなわち結婚は夫婦関係の開始ではなく、家庭経済のパートナー関係を結ぶこととした。外部の敵と貧困に対処するために、俄亜ナシは、

アンダ関係を兄弟共妻や姉妹共夫という婚姻形態を裏で維持する制度として容認してきたのである。

本村では、結婚は一夫一妻の婚姻が一般的になった現在でもなお、貧困がなお今日的な問題である以上、本人の意思だけではきめられない状況にある。大家族という形態は、経済的豊かさを実現するためにはなお有効だからである。ただし一夫一妻を当然とする若い世代が、結婚後の他者とのアンダ関係をそのまま「老規矩」として容認するとは考えにくい。結婚と家庭経済の維持という旧来の結びつきの変化は今後、さけられないといえよう。

〔引用文献〕

- 宋兆麟（2003）『俄亜大村——一块巨大的社会活化石』四川人民出版社
- 松岡正子（2007）「四川ナシ族における祭天と祭山（1）——俄亜ナシを事例として」『国際問題研究所紀要』第130号 愛知大学国際問題研究所 183～202頁
- 李近春（1987）「四川省塩源县沿海公社達住村納西族社会歴史調査」『四川省納西族社会歴史調査』四川省社会科学院出版社 1～6頁
- 劉龍初（1987）「四川省木里藏族自治县俄亜納西族社会歴史調査」『四川省納西族社会歴史調査』四川省社会科学院出版社 70～132頁